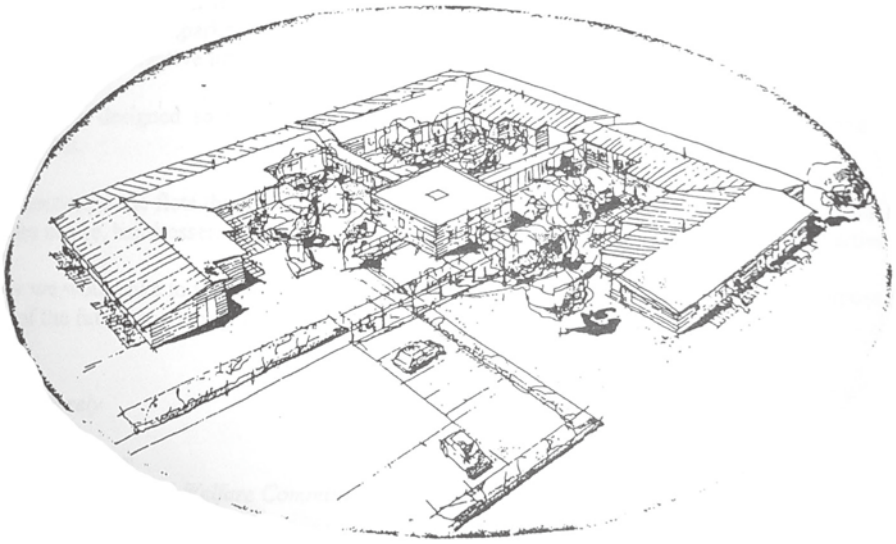
これから造られる
ファーラム市の多機能施設



ファーラム・コミュニティ

Cities of Tomorrow

International Network
for Better Local Government

●はじめに

ファーラム市における多機能なナーシングホーム

ファーラム市は１９９８年度中に高齢者市民の方々に高齢者や障害者のニーズにあわせて設計した１０５床の近代的なフラット（フラットは「平ら」という意味だが、ヨーロッパでは集合住宅の意味で使用されることが多い）に移っていただく計画をたてている。

ファーラム市では高齢者のニーズをアセスメントし、特別な支援が必要であることが示されたときには、高齢者のための認定入居施設を紹介している。市はこの入居施設を多機能ナーシングホームとして認定している。

各フラット（個室）は４０㎡。フレドトフテパーケンの標準的な多機能ナーシングホームの２倍のサイズとなる。また入居者は約２００㎡の共通スペースを使うことができる。各居室には魅力的な小さなテラスが作られている。

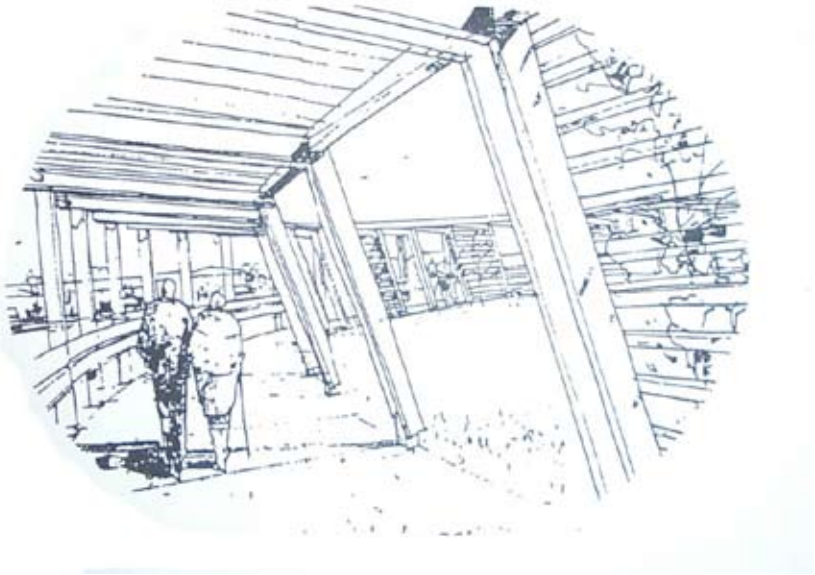
各フラットは個人のニーズを満たすように設計されている。各スタッフにとっても働きやすい環境だ。

フラットと接続する形で、アクティビティセンターがあり、リハビリテーション、デイケアセンター、美容院、カイロプラクティックス、歯科、ディナーパーティー用のリビングが配置されている。

私たちはこのユニークで多機能な未来的ナーシングホームを造ることに参加してくださったすべての人、利用者、スタッフ、管理者の方々に感謝したい。

敬　具

マリアンヌ・ヘルスレブ
社会福祉委員会議長
ビリー・ハンセン
居住協会議長



パーゴラは各アクテ

●バックグラウンドと議案

ファーラム市は１９９５年に高齢者と障害者分野の調査を開始した。目的は１０年後に予想される高齢者・障害者の動向について焦点をあて、高齢者・障害者ニーズに応じた活動は何かを絞り込むために、基本的なコンセプトを構築することだ。

プロジェクトチームは社会福祉委員会、管理者グループ、施設運営の理念を検討する委員会で構成され、これらの人々がプロジェクトの舵を握ることになった。

ファーラム市は将来、高齢者市民の増加が予想され、これに対し一定の予算を割く必要がある。そのために、物理的な条件をクリアしておく必要にせまられていた。そのため、ファーラム市議会は新しいタイプの多機能施設をつくることを決定することに至った。それは１０５床のフラットと中央の建物とで構成される施設であった。この多機能ナーシングホームはファーラム市のもっとも弱い市民のニーズにあわせて特別にデザインされた。この市民たちは、痴呆や他の包括的な介護が必要な人たちである。

●多機能ナーシングホームは施設らしさを感じさせないものにする

ファーラム市はダンスク・ボリグセルスカブと地域のハウジング協会のファーラムセーダルをナーシングホームの開発者として選定し、コラボレーションが生まれることをねらった。

プロジェクトチームは、１９９６年、その理念と方向性を決めた。それは社会福祉の観点からだけではなく、建築的な理想を追求したものであった。

８月の終わりに、リレバングの新しい多機能ナーシングホームの建築設計案が固まった。１９９６年の９月、ファーラム市議会は将来の基本計画が構築されたのを受け、その計画の実施を議会決定した。

１９９７年の２月、プロジェクトは実施に移され、４月２８日に工事開始、１９９８年の２月１日には最初の入居者が入居できることとなった。

●基本的なコンセプト

未来の利用方法に合致した建物を建設する最も適した方法のひとつは、一般的なニーズにあった建物を建てることであり、現在の特別なニーズに焦点をあてることではない。

住まいや生活環境のデザインがこれからのスタンダードとなり、そのサイズも適切なものとなるならば、その建物は将来、ニーズが多様に変化しても、もうまく合致させることができると思われる。

今日私たちは特別なニーズに合わせてアパートをデザインしがちである。例えば痴呆性老人の専用アパートなどを設計しがちである。多様なニーズに合致し、将来もきちんと使われるためには、痴呆という障害がある人々でも、必要な居住サービスと介護を受けることができるようにしなければならないことはもちろんであるが、なんといっても、一般的な包括的介護が必要な人々にとってもよい住まいとすることが必要である。

重要な基準のひとつに、入居者の自己決定とその環境に対する影響を考慮することがあった。また、彼ら自身がもっている様々な能力をできるだけ制限しないような環境をつくることが設計の基準にあげられた。

スタッフとセンターの建設作業はこの姿勢に特徴があったといっても過言ではない。

決定的だったこと

建物は「生活空間」をつくるために、人と空間とのかかわりを強調できるような要素をいたるところで発見できるようにした。例をあげれば、光、水、色だ。

すべての居住ユニットは個々の入居者が自分の居室の中でプライバシーが確保できるようにしただけではなく、居住ユニットの入居者どうしがかかわりを持てるように設備を作っていった。

入居者とスタッフの間で社会的なかかわりあいが造られるように、すべての機能－例えばキッチン、洗濯、掃除などをフラットの中に近接して設置した。

入居者の家族や親類からの申し出があれば、彼らの持っている資源が許す限り、サポートをする機会が与えられた。全体をとおして、家庭的な親密さや安心感がこの多機能ナーシングホームで体験できるようにすることが計画の目標であったし、それを実現するための建築デザインとなった。

私たちは、戸外での活動が生活環境の総合的な質を左右すると考えた。多様な季節感を味わえるように、ガーデンエリアを優先的にデザインした。

●建物の主要な構造

多機能ナーシングホームは美しい景色を楽しめるリレバングにある。リレバングはファーラム市の西の地区にあり、ナーシングホームを取り囲んで護ってくれているようなグリーンベルト地帯を施設から眺めることができる。

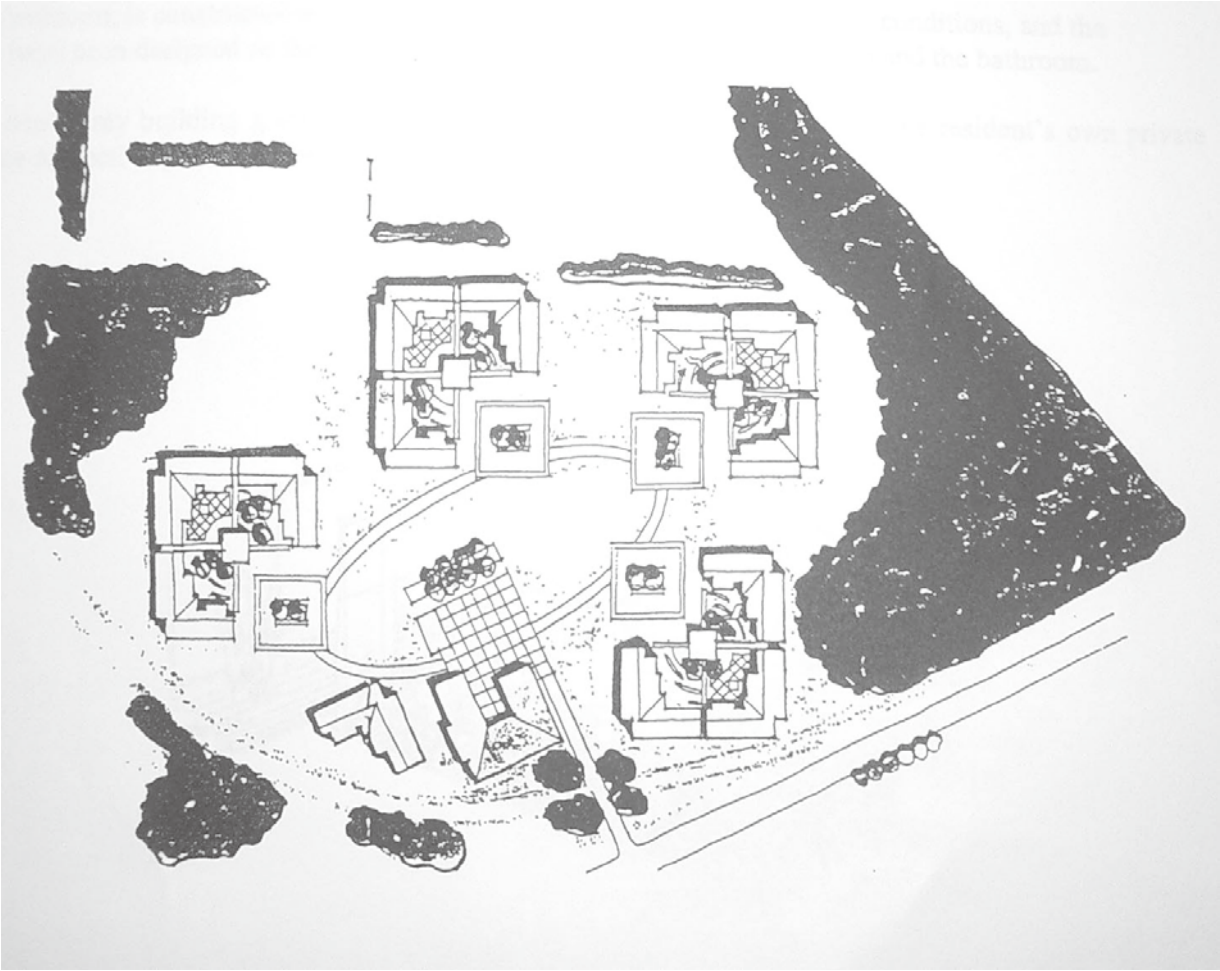
土地面積は３３０００㎡。建物がある部分の面積は約１００００㎡となる。

居室は全体で１０５あり、４つの居住群に分けられる。各居住群は３つの居住ユニットで構成され、それぞれのユニットは８つの居室を持つ。各ユニットには共通空間がある。実際に長期利用される居室としては９６床となる。

デイアクティビティセンターは約１４００㎡である。このセンターは自治体の高齢者のためのデイケアセンターとして機能する予定である。

デイアクティビティセンターは「センタービル」として機能する。４つの居住群がセンタービルを「扇風機の羽」のように取り囲む形になっている。

フラッツとセンターは全体で一体的な建物となっている。



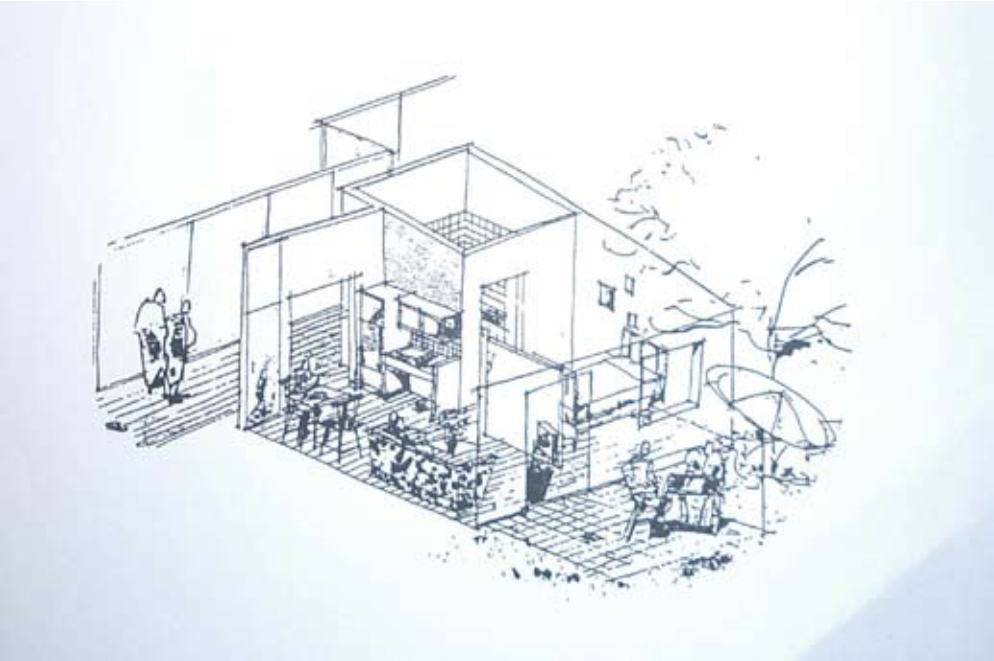
●フラット

フラットは約４０㎡である。ひとつの大きな部屋を、いろいろ柔軟に使うことができるようにするため、可動式の壁でリビングと寝室を分けている。

個々のフラットのプライバシーを確保するため、フラットのつくりつけ家具をうまく配置したり、それができるようなデザインを行った。目的は、個人の潜在的な能力を生かすことができるようにすることと、スタッフがよい仕事をすることができるような環境を確保することの２つである。

バスルームは２人のケア担当者が最適なコンディションで仕事ができるように設計した。ベッドルームとバスルームの間には稼動リフトを設置できるようにした。

建物が一体化しているため、共通スペースに居室から出ることができるし、入居者の個人的なテラスへ各々出ることができる。このことは建物の空間認識に役立つ。



●居住ユニット

個々の居住ユニットはＬ字型で､約４０㎡の個人空間が８つ集まって構成されている。フラッツは共通スペースの周りに集まっており、その共通空間は居住ユニットの住人にだけ使用されるようになっている。

共通スペースは約２００㎡。総合的な居住空間は８人に対して５２０㎡となる。

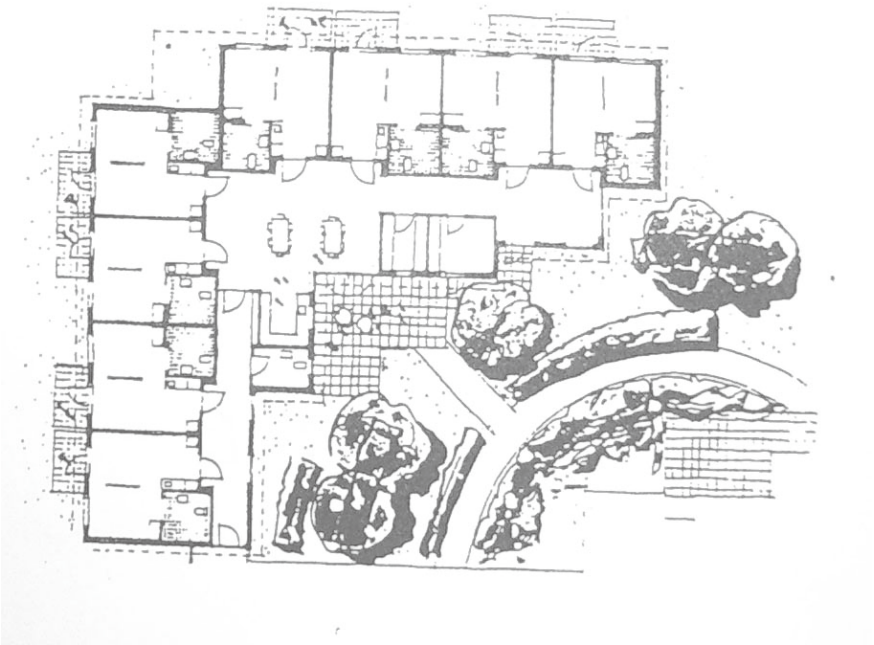
Ｌ字型居住ユニットは共通の庭を取り囲んでいる。居住ユニットはグラスパネルで覆われたぱパーゴラにつながり、外空間と建物内に連続的につながっている。それは光を与えており、快適な雰囲気の共通スペースとなっている。

各フラットにつながって、小さな庭があり、フラットから外への広がりを感じさせている。

デザインの理念として強調したいことは、日常的な生活の雑多な事柄を毎日の居住ユニットの中心的な要素とすることだった。

つまり、料理、洗濯、掃除などの他、ゲームを楽しんだり、毎日の日課をこなしたり、身体運動を行ったりといったことがこの生活そのものなのだ。

スタッフはここでは基本的に仕事をするのだが、入居者は、自身が望んだり希望したりすることを、毎日の生活の一部として実現していくことになる。



●居住群

各居住群は３つの居住ユニットで構成される。合計２４のフラッツが集まったものになっている。

全部集まれば４面の庭があり、各ユニットから見ると、それぞれ違ったながめを生み出している。

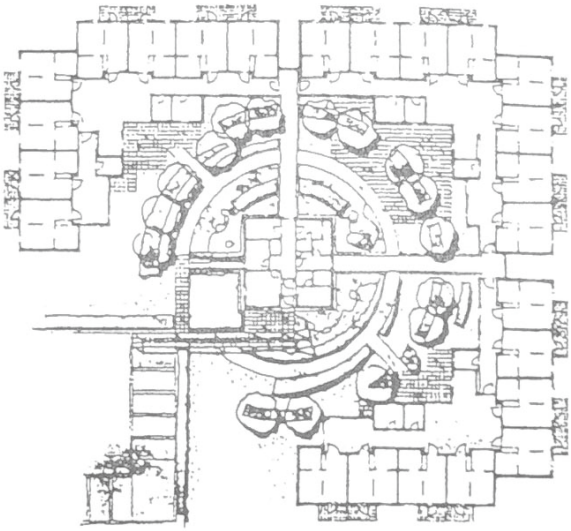
各居住群につながって、約１００㎡のスタッフ施設がある。多目的ルーム、事務所、グループルーム、倉庫で構成される。

家族のためにゲストルームがある。しかし、それは、緊急性のあるような事例のために使用される。

居住のための建物と、スタッフの建物はガラス天井の廊下で結ばれており、それは、各居住群を３つの庭に分離している。３つの中の２つについては、半分開放された空間であり、１つは閉じた空間となっている。

廊下が配置されていることによって、不必要に居住者が共通スペースを横断してしまうことを少なくしている。

庭は多様な感覚刺激になると同時に、閉じた感覚が味わえるようにデザインもされている。



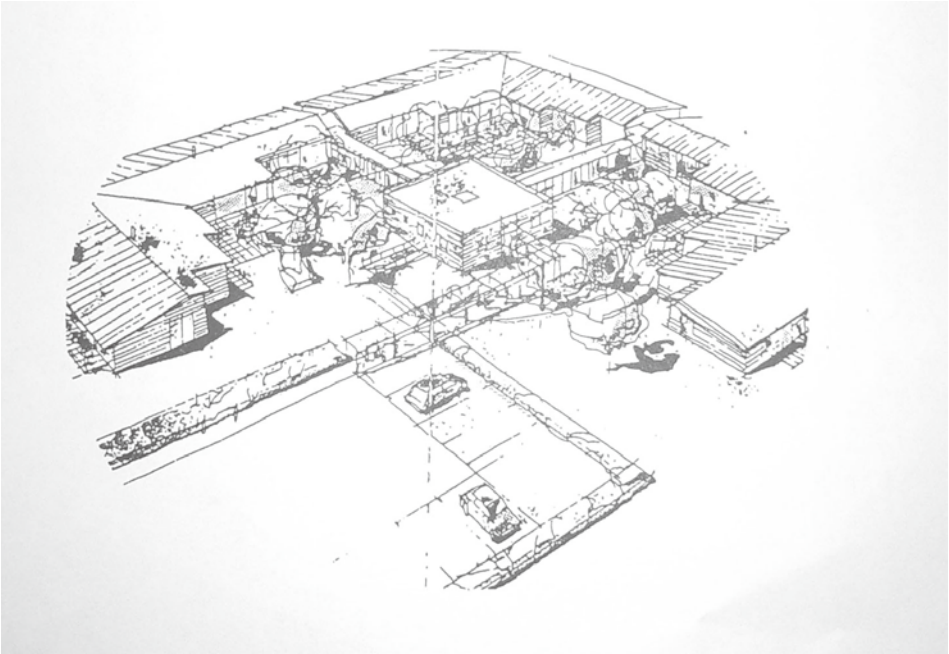
●アクティビティセンター

今後、自治体から多様な活動を行うよう提示があることが予想される。また、居住ユニット全体の入所者の活動も変化していくことが予想される。これらのニーズの変化に連動して対応できるよう、センタービルの大きさや機能を簡単に調整できるように建物を設計した。

また、多様なニーズに対応するために各部屋の機能も調整可能な設計となっている。

センターは約１４００㎡で、以下の機能が含まれる。

１）デイケアセンター　痴呆高齢者のデイケアセンターを含む
２）カフェテリア
３）キッチン（配食サービスを含む）
４）サービスショップ
５）管理機能
６）介護技術教育機能
７）整髪／歯科衛生
８）カイロプラクティックス
９）自立生活支援を目的としたキッチン

センターの毎日の活動はそれぞれ独立しているが、特別な目的のために、柔軟に協働的に調整することが可能である。

センターの構造のガイドラインひとつに、居住空間は時代が異なれば、ニーズが変化しても、機能を果たすことができるようにしなければならないというものがある。建物には物理的な枠組みがあるが、その機能を最大限生かしていくことが、今後、われわれの成し遂げなければならないことである。